

サンドバッグ サタデー！

＜私のニューヨーク物語③＞

前号・前々号でも述べましたが、補習授業校は、土曜日や放課後等を利用して、主として、国語や算数(数学)などの一部の教科について、日本語で授業を行う教育施設です。

私が派遣されたニューヨーク補習授業校も、毎週土曜日一日のみの学校で、授業日が年間40日程度の学校でした。

派遣が決まってから、「仕事何するの？」といろいろな人から聞かれましたが、聞かれても自分自身もよくわかりませんでした。

実際に赴任して、その仕事の異質なことに驚きました。とにかく一言で、何でも屋なのです。日本の学校の、校長、教頭、教務主任、研究主任、生徒指導主事、養護教諭、事務員、教員業務支援員、PTA担当、地域教育コーディネーター、用務員、等々、そして教育委員会や教育支援センターの管理主事・指導主事、その役職のすべての仕事、つまり担任業務以外の一切を一人でやるようなものでした。当然です。授業日には、担任の先生の他は、2・3名の現地雇用の事務員以外、学校スタッフは私以外にはいないのですから。そして、自前の校舎が存在しないのですから。

現地の中学校を土曜日だけ借用して授業をします。朝早く一番に学校に行って、その日だけ日本の学校に様変わり、転換する様々な準備をします。各種サインや掲示物等をセットしたり、事務所から運んできた担任の先生から印刷するように頼まれた学習プリントや教材・教具を先生方に渡したり、授業改善へのアドバイスのために先生方の授業を参観して回ったり、借用校の備品等を破損した案件の処理をしたり、不審者情報に対応したり、先生や保護者の要望や苦情に応えたり、PTA役員の方々と打ち合わせをしたり、学校見学家族の学校説明や学校案内をしたり、転出入の申し出を受け付けたり、時には設置運営主体の教育審議会（大企業の代表者で構成）

の役員と会議をしたり、すべて土曜日一日に濃縮されている業務で、目が回る様な忙しさでした。

関係する人間が一堂に顔を合わせるのは週に一度のその日しかありませんので、ありとあらゆる報告・連絡・相談・要望・苦情・お願いのすべてが、先生方、保護者、教育審議会の役員等から山のよりにきます。一日終わると半端ない疲労感に襲われたものでした。

当然、教頭という管理職の立場ですので、先生方の研修のためのモデル授業はすることがあっても、自分で授業をすることはありませんでした。教員として一番脂ののっている時期だったのに直接子どもたちに指導できないことも、それはそれでストレスでした。

「土曜日以外は何しているの？」これもよく周囲から尋ねられました。このことも、赴任するまではよくわかりませんでした。

日曜日と月曜日が休みで、火曜日から金曜日は事務所での仕事です。校長先生や自分の担当校以外の他の2つの地区校の教頭先生方と会議をしたり、翌週の授業の準備などの事務仕事を中心です。補習授業校全体の運営に関わる内容や、前回の授業日にもたされたあらゆる案件の処理に向けた会議や打ち合わせ、お願いされた印刷や資料の準備、授業改善のためのアドバイスや研修資料の作成などなど、週1回の借用校での授業であるがゆえの下準備の仕事は、雑多で多岐にわたるものでした。

さて、一方で、私がニューヨーク補習授業校への赴任が決まってから、現地で実際に勤務している派遣の現職先生方や過去にその学校に勤務した派遣教員等から、また、渡航前の文部科学省主催の中央研修会でも、いろいろな内部事情を聞かせていただきました。

事前に皆さんから話していただいた内容は、ほぼ同じようなものでした。

ニューヨーク補習授業校は世界の在外教育施設の中でもかなり特異な存在で、学校運営の舵取りが極めて難しい学校である。そのため派遣の先生方の心労は絶えず、メンタルが強くないと勤まらないし、公私の切り替えを上手にできない人間はつぶれる、と半ば脅されているようでした。

それらの情報は全般的な外れではないことが、実際に勤務してよくわかりました。事前の情報と、現実を含めて、学校運営の舵取りが困難だとの根拠をいくつか挙げてみます。

- ① 子どもは、総じて学力は高い。ただ、永住組の子はアメリカ生まれで十分に日本語が身に付いていない子もいる。国籍・人種はもちろんのこと、日本語力の差、日本語による学力差が大きく異なる子が混在する学級集団を相手に、全体指導しなければならない難しさがある。
- ② 現地の担任の先生方は、アメリカに永住している日本人で、平日は別の正規の仕事をしていて、土曜日だけ教鞭を執っている。教員免許をもっている人は皆無である。日本の先生方に比べれば、全体的に教科指導力は見劣りする。
- ③ 現地の担任の先生方は、勤務年数が長いベテランの先生が多く、補習授業校の存在意義と自分がその教員であることに誇りを持ち、学校を長年は支えてきたのは我々だと大いなる自負を抱いている。文部科学省からの派遣教員は、何のリスクも負わずにただか2～4年で交代する物見遊山の輩だと捉えている先生も中にはいる。
- ④ 現地の先生方、現地採用職員や永住組の保護者の日本人は、ニューヨークに永住するに至る経緯やキャリア、バックグラウンドは多種多様だが、世界一の大都市で生き馬の目を抜いて生きてきただけあって、海千山千の人物ばかりである。
- ⑤ 日本の駐在員は、有名大手企業の金融・商社・メーカー、政府機関等の、いわば高学歴・高収入の方が多く、教育に関しても熱心で一家言もっている人も多い。
- ⑥ 週に土曜日に一度の学校だが、担任の先生方は自分の学級の指導・管理が主である。

図書貸し出し、巡視による安全確認、学校行事の運営、放課後クラブ活動の運営、学級の連絡等、保護者のボランティアに頼らざるを得ない。そのいったい仕事やそれに伴う

人間関係の煩わしさから、補習授業校を選択するのを敬遠したり、年度途中や新年度を機に学校を辞める家庭も少なくない。

- ⑦ 現地の先生方と設置運営主体である教育審議会とが、コントラクト(労働条件に関する契約)を交わしている、世界でも稀な在外教育施設である。その中の最も重要な内容の一つに、シニオリティ (seniority 先任権) の条項がある。
- ⑧ 日本人のコミュニティは狭い。例えば、日本の食材店などは少なく限られているので、そこで買物する先生方や保護者は多い。「教頭先生が、先週大根と人参を買っていった。」など、プライベートの情報は瞬く間に拡散する。
- ⑨ 現地のアメリカ人 (特に白人) から差別・偏見を感じる場面が多い。

「どんな仕事をしていたの？」と聞かれれば、例えるなら、サンドバックのような仕事、というのが一番的確でしょうか。いろいろな方々からいろいろな相談・不平・不満・要望・要求・愚痴・恨み節等々が、特に土曜日に怒涛の如く浴びせられました。

あちこちから打たれても殴られても蹴られても、決して壊れずに必ず中心に戻って来る。それこそが私に与えられた最大のミッションだったのかもしれない。